わくわく広報

W・A・K・U
W・A・K・U
W・A・K・U・Y・A

12
Dec. 2019
No.773

東大寺の大仏さま、
金のいぶきを
お届けに参りました。

—特　集—

金のいぶき

日本初の産金地であり、基幹産業を農業とする涌谷町として本格的なブランド化の3年目を迎えた今年。11戸の生産者が、12ヘクタールの面積に作付けし、新たに箟岳白山小学校の学習田でも、地域の皆さんとともに栽培に挑戦しました。日本初の産金の歴史が、日本遺産に認定された今年の金のいぶきを振り返ります。

令和元年産の品質と収量

令和元年産「金のいぶき」は、品質が向上した平成30年と比較して、さらに収量と品質が向上しました。生産強化をし始めて3年目を迎え、過去2年間で得られたデータを栽培マニュアル化するとともに、生産者の皆さんも栽培管理を徹底。

稲が生育する6月から7月に気温が低く、出穂する8月以降は高温となったことで収量と品質が心配されましたが、播種や稲刈り、宮城県の生産基準に基づいた追肥を適期に行ったことで、根の張りが強くなり、倒伏することなく十分に養分を吸収して食味も向上しました。

8月の高温によってうるち米の一等米比率が低下する中、涌谷町の「金のいぶき」は、収量が多かった生産者では1反あたり10俵(昨年平均6俵半)、食

味値で83(70以上で良食味値で昨年の値は73)という成果を上げました。

過去最高品質の金のいぶきを東大寺へ

今年も昨年に引き続き、収穫した「金のいぶき」を、奈良市で11月3日(日)に行われた平城京天平祭東大寺参詣に併せて「現代の金」として大仏さまに献納。献納にあたり、東大寺狭川普文別当を中心に東大寺の皆さまに法要を執り行っていただきました。

今年の天平行列には、俳優で奈良市観光特別大使の加藤雅也氏が聖武天皇役で参加し華やかさがグレードアップ。そこに、遠藤町長と生産者に加えて栽培にかかわった箟岳白山小学校の5年生児童の男澤璃香(おとざわりこ)さんと村田菜緒(むらたなお)さんが天平衣装をまとって参加し、大勢が注目する中、立派に献納してきました。

春―田植え―

秋―稲刈り―

地域の皆さんとともに現代の金を生産

篭岳白山小学校では、平成29年度以来、旧篭岳中学校が実習田としていた田んぼを学習田として、地域の生産者や老人クラブの皆さんに協力いただきながら「もち米」を栽培してきました。

今年は、涌谷町の日本初の産金の歴史を背景とした涌谷町産ブランド米「金のいぶき」の取り組みに関心を寄せていただき、JA新みやぎ稲作生産部会涌谷支部の土生木勝洋氏の全面的な協力のもと、5年生児童が取り組みました。

春には、昔ながらの手植えで田植えに挑戦。代かきされた田んぼに裸足で入り、泥だらけになっていました。

夏から収穫時期までの期間は、自らも「金のいぶき」を生産する土生木氏に、水管理や追肥を対応いただいたおかげで、収量・品質ともに良い作柄となりました。

そして、台風19号が襲来する直前の10月9日(水)に、地域の皆さんに手ほどきしてもらいながら、稲を手刈りするだけではなく、棒掛けするための稲の束作りまで体験しました。

収穫した「金のいぶき」は、土生木氏が台風前に保管していたことで、被害を免れました。

いざ東大寺へ

今年の東大寺への「金のいぶき」の献納者を栽培に携わった篭岳白山小学校の5年生児童に募ったところ、応募が殺到。作文と面接での審査が行われるほど、厳正な選抜となりました。

11月16日(土)に、篦岳白山小学校で催された「みのり祭り」で、男澤璃香さんと村田菜緒さんが、奈良東大寺への「金のいぶき」の献納について報告しました。

報告内容(一部抜粋)

大仏は何回も修理されましたが、今も足と台座の一部分が元の姿で残っていて、そこにある涌谷の金を直接見ることができて感動しました。

そして、日本ではとれないといわれていた金が涌谷で発見され、約13キロの金が献上され、とても感謝されたと聞きうれしく感じました。

金をどのようにして運んだか知りたいと思いました。

奈良の大仏は昔の人たちのたくさんの努力があったからこそ、みんなの心が一つになることができたんじゃないかなと思いました。

これからも奈良の大仏と涌谷の金のいぶきをたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

涌谷町の現代の金として輝きを増す「金のいぶき」

金のいぶきが郷土への誇りと愛を育む

11月19日(火)には、涌谷町の小中学校の学校給食で、令和元年産「金のいぶき」の新米が提供されました。

「金のいぶき」を味わう子どもたちから、「金のいぶき、大好き」「久しぶりの金のいぶき」と給食を喜ぶ声が聞かれ、男の子も女の子もおかわりをしていました。子どもたちにも親しまれる存在に、着実になりつつある「金のいぶき」。

また、「なぜ『金のいぶき』に取り組むのか。涌谷町が日本初の産金地だから、今の涌谷町を盛り上げるため」と、ある生産者は明言。

「金のいぶき」の生産が3年目を迎え、日本初の産金地・涌谷町だからこその成果が黄金色に実り始めています。

秋の山唄全国大会史上最年少の栄冠

秋の山唄

11月9日(土)10日(日)の2日間、第35回秋の山唄全国大会が行われ、少年少女の部16人、寿年の部46人、一般の部80人が、北は北海道、南は岡山県と全国各地からエントリー。晩秋の涌谷町で自慢の唄声を披露し競い合いました。

第35回の一般の部で優勝したのは、多賀城市から出場した鈴木怜菜(すずきれいな)さん。

鈴木さんは、大和町で開催された第32回お立ち酒全国大会一般の部で優勝し、本大会初日にゲストとして出演。そして、本大会においても、弱冠18歳にして篁峯寺杯の栄冠を手にしました。

篁峯寺での秋の山唄奉納後、「優勝という結果に驚いています。まだまだ未熟者なので、この経験を生かしていろいろな大会に挑戦していきながら、大好きな秋の山唄を歌い続けていきたい」と今後の抱負を語りました。

準優勝には第1回大会から出場し続けている涌谷町の門田進作(もんでんしんさく)さんが、第3位には愛知県名古屋市から出場された市川元美(いちかわもとみ)さんが見事な唄声で入賞されました。

①

②

③

一般の部に先立ち、秋の山唄全国大会1日目に開催された少年少女の部では、東松島市から出場された櫻井陽与里さんが優勝。

寿年の部では、秋の山唄全国大会一般の部の常連でもある埼玉県春日部市から出場された川畑ツア子さんが優勝されました。

また、一般の部には、昨年の第34回大会少年少女の部で優勝した江端菜沙さんが出場。決選会まで進出し、その実力を示しました。

⑤

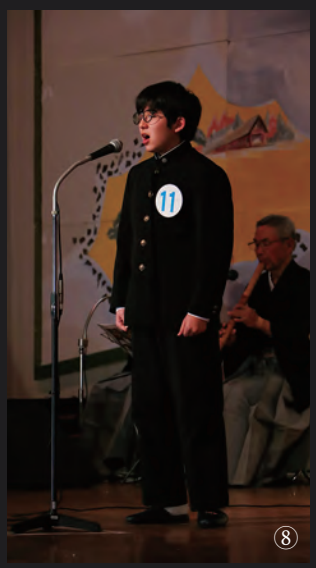
④

⑦

⑥

また、少年少女の部には、月将館小学校や涌谷中学校でふるさと教育の一環として「秋の山唄」を学んだ児童生徒が出場。年々出場者が減少傾向にある大会を盛り上げるとともに、「秋の山唄」発祥の地・涌谷町としての威信を示しました。

アトラクションでは、涌谷町の伝統芸能の箟岳白山豊年踊りと涌谷お茶屋節おどりをふるさと教育の一環として学び習得した次代を担う子どもたちによって披露されました。さらに、涌谷新星レクダンスや嵯峨舞芯会、若柳寿鷹会、生田流箏曲繍園会、祭・WAKUYOSA舞桜といった涌谷町内で活動する団体の皆さんが日頃の成果を披露し秋の山唄全国大会に花を添えました。



⑧

【写真解説】
①優勝した鈴木怜菜さん。鈴木さんの若々しくもすばらしい唄声が、箟岳山箟峯寺に響き渡った②熟練の唄声を披露した準優勝の門田進作さん③第３位の愛知県名古屋市から出場された市川元美さん ④少年少女の部優勝の櫻井陽与里さん⑤寿年の部優勝の川畑ツア子さん⑥会場を大いに盛り上げてくれたアトラクションを披露した皆さん⑦⑧郷土の文化を守るため習得し、大会に出場した月将館小学校と涌谷中学校の児童生徒の皆さん